

シリーズ

東久留米の学校史

その8

戦時下の学校

久留米村の昭和初期は、自由学園や久留米学園、豊島成美荘など特色のある学校施設が次々に開設されましたが、昭和10年代に入ると、時代は戦争へ戦争へとその道を進んでいきます。今号はそんな戦時下の学校の様子をみてみましょう。

国民学校

昭和16年（1941年）4月1日、久留米小学校は久留米国民学校と名称を変更しました。同年に施行された「国民学校令」に基づくもので、それまでの尋常高等小学校はすべて国民学校となりました。6年間の初等科と2年間の高等科からなり、義務教育がそれまでの6年間から8年間に延長されましたが、実際には施行が延期され、延長は行われませんでした。

国民学校は、その背景に日中戦争の社会情勢に対応して国に奉仕する心を持った「小国民」の育成を目指したものであり、学校は鍛錬の場として位置づけられました。教科も初等科では、国民科（修



写真1

↑ 雑刀(なぎなた)の訓練をする女子児童(昭和20年撮影・「一小百年のあゆみ」より)

身・国語・国史・地理、理科(算数・理科)、体操科(武道・体操)、芸術科(音楽・習字・図画・工作)の4教科にまとめられ、各教科のなかに科目をおきました。そして、教科内容は全体的に国家主義・軍国主義的な色彩が強いものでした。

同年12月8日にアジア・太平洋戦争の開戦となります。学校も戦時下の体制が強化され、軍事教練などが行われるとともに、空襲に備えて防空壕も設置されました(写真1)。さらに、久留米国民学校では、暑敷きの家庭科教室が近くにあって陸軍の北多摩通信所の宿舎に使われるなど、戦争の影響は日増しに大きくなっていきました。

青年学校

昭和10年（1935年）4月1日に「青年学校令」が公布され、農業公民学校と青年訓練所を統合した「久留米青年学校」が設置されました。青年学校では、文部省と陸軍省が協力して、主に義務教育終了後の青少年に職業や実生活に必要な知識と技能を教授することから、文部省では社会教育の一部として取り扱

いきましたが、青年学校の五大方針のなかの「鍛錬を旨とし強固なる意志と強健なる身体とを育成すべし」という文章からも明らかのように、青年学校は鍛錬を行う場所でした。戦時中、教育現場では、この鍛錬(鍛える)という言葉

葉があらゆる場面で強調されるようになり、その淵源は青年学校にあったといわれています。

青年学校の教育課程は、普通科2年、本科は男子5年・女子3年、研究科は1年以上で、普通科は修身及び公民科・普通学・職業科・体操科、女子は家事及び裁縫が授業科目でした。本科ではそれらに男子のみ軍事訓練の教練科を加え、女子には家事及び裁縫科を加えました。これらの教科のなかで、男子の教練科に最も多くの時間が割かれ、本科5年生では180時間のうち約40%の70時間が充てられました。青年学校の男子は、多くの時間、この軍事教練を受けました(写真2)。

昭和12年（1937年）に陸軍省は青年学校の男子のみの義務化方針を決定し、昭和14年度から実施されました。青年学校の男子義務化は、兵役年齢前の男子のすべてに軍事教練を義務づけることであ

「久留米青年学校の教練の様子(昭和11年撮影・光の交響詩」より)



写真2



写真3

↑ 戦時中に疎開学園に使われた「久留米学園」(昭和47年撮影・「光の交響詩」より)

り、まさに戦時体制に備えた青年学校の存在の意味を示しています。

久留米青年学校は、設立当初は村立でしたが、久留米小学校東分教場(南沢)の西側に隣接して施設が建設され、昭和12年に東京府に移管され、組織的には豊島師範学校に併置されました。当時、青年学校はほとんど町村立であり、東京府立は3校のみでした。

学童疎開

〈久留米疎開学園〉

昭和19年（1944年）3月、食糧事情の悪化や空襲の危険を予測した政府は、「人員疎開」についての検討を始め、学童には縁故疎開を奨励しました。東京都は、学童の集団疎開を具体化し、4月に公共施設を転用した「戦時疎開学園」を開設することを決定し、久留米村の都立久留米学園が荒川区に割り当てられ「久留米疎開学園」となりま

した(写真3)。

久留米学園は、昭和11年（1936年）に身体が弱い児童のための療養教育施設として久留米村大字野火止(現

野火止二丁目)に開園しましたが、その学園を一時的に「疎開学園」として転用しようとするもので、これは、政府が行った昭和19年7月の学童集団疎開議定決定以前に実施された限定的な集団疎開であり、5月から8月にかけて久留米学園の児童と入れ替わるように荒川区から218名の学童が疎開してきました。

しかし、11月24日以降のB29による中島飛行機武蔵製作所への空襲の激化に伴い、久留米村にも危険が及んだため、開設7か月後の12月25日をもって疎開学園は閉鎖され、荒川区の学童は福島県に集団疎開しました。その後、都立誠明学園が施設の一部を使用し、さらに、昭和20年からは陸軍北多摩通信所の宿舎として一部が使用され、教育施設の軍事転用が行われました。

昭和19年8月、久留米村大字小山(現水川台二丁目)の豊島成美荘に東京第二師範学校附属国民学校の80名が集団疎開しました。成美荘は、明治41年（1908年）に北豊島郡栗嶋村(現豊島区池袋)

に教員の養成を目的として創設された東京府豊島師範学校が昭和11年に野外の研修施設(道場)として開設したもので、「養気園(ようきかき)」と命名された宿泊所が建設されました。昭和18年に豊島師範学校は国立への移管に伴って東京第二師範学校となり、その附属小学校の児童の疎開先として成美荘が使用されました。

昭和19年8月、港区立青山国民学校の27名が小山二丁目

〈大圓寺〉

の大圓寺(たいえんじ)に疎開しました。また、大圓寺は、戦後の昭和20年11月に戦災孤児学寮(大圓寺学寮)を発足させています。

静かな農村地帯と思われた久留米村も、子どもたちにとっては決して安住の地ではなく、そこも確かに戦時下だったのです(以下次号)。

(本文は山崎 文・市文化財保護審議会委員による) 詳しくは生涯学習課文化財係 ☎472・0051へ。

平成30年度 東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果をお知らせします

〔実施日〕平成30年7月5日 〔対象〕小学校5年生及び中学校2年生 〔教科〕国語、社会、算数・数学、理科、英語(中学校)

市教育委員会では、児童・生徒の学力向上を図るため、全国や東京都による調査のほか、市独自の調査も実施しています。今号では、東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果から、小学校の理科の定着が不十分な(平均正答率が低い)問題を例に、本市の課題を探ります。詳しくは指導室 ☎470・7781へ。

【調査結果概要】

教科全体では、平均正答率が全て東京都の平均を下回っていました(表1)。例えば、算数・数学の場合、四則計算の定着が不十分な例としては、算数では「10-3×2」等の四則混合の計算がありますが、平均偏差値は市が31.8%、都が50.0%でした。「10-3×2」の場合は、前から順番に計算している誤答例が多くありました。数学では「-3×7」という累乗を含む正負の数のかけ算があり、平均正答率は市が60.8%、都が67.9%という結果でした。

【定着が不十分な理科】

理科の問題の一つに、体重を測るものがありました。「物は形が変わっても重さは変わらない」ことを理解しているかが問題のねらいです。平均正答率は東京都では50.0%、本市は32.0という結果でした。小学校で学ぶ理科は他の教科同様、日常生活に密着しており、日々の生活そのものが大切な「問題」となります。

宮下英雄教育委員(特定非営利活動法人こども科学教育振興協会理事長・全国小学校理科研究協議会元会長)に、結果から見える課題について伺いました。

「子どもはさまざまな経験を通して、自分の体験から作り上げた『素朴概念』を形成しています。その概念をより確かな概念に形成していく営みが、『学習活動』です。しかし、誤概念のまま通り過ぎている傾向が目立ちます。特に、調査対象である『物と重さ』については誤概念を生じやすく、国際数学・理科教育動向調査においても、日本の子どもたちの問題点が明確になってきました。学習指導要領改訂の中で『物と重さ』について、①物は形が変わっても重さは変わらないこと、②物は体積が同じでも重さは違うことがあること等の指導事項が設定され、実感を伴った活動を通して、物の性質についての見方や考え方の育成が図られています。この内容は、『粒子』という、科学の基本的な見方や概念を柱とした内容のうちの「粒子の保存性」に関わるもので、子どもたちの発達段階を踏まえ、小・中・高等学校を通じて、理科の内容の構造化につながる大切な調査内容です。

私は教育委員の立場からも、理数系はもちろん、それ以外の教科についても、本市の子どもたちの学力向上が確かに進められていくよう、授業改善と子どもの思考過程を振り返る活動を見守っていきます。」

〈表1 国語、社会、算数・数学、理解、社会の平均正答率〉

Table with 6 columns: 教科, 国語, 社会, 算数・数学, 理科, 英語. Rows for 小学校 and 中学校. Includes average scores for Tokyo and the city.

※カッコ内は都の平均正答率

【問題】 次の【いろいろなばかり方】のように、体重計の上で、両足で立って体重をはかったときの重さと、かた足で立ったり、しゃがんだりして体重をはかったときの重さを比べた結果の組み合わせとして最もふさわしいものを、下のアからエまでの中から1つ選び、記号で答えましょう。

【いろいろなばかり方】



Table with 3 columns: Method (ア, イ, ウ, エ), Weight change (軽くなる, 変わらない, 重くなる), and Answer (ア, イ, ウ, エ).

【平均正答率】東京都：50.0%、市32.0% ※正答は4面にあります。

※出典 平成30年度東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の小学校理科